

## 山口県・おのクリニック

〒746-0018 山口県周南市大神3丁目12-1  
<https://www.ono-cli.jp>

- 院長：小野 薫
- 設立：2007年
- 診療科：内科、循環器内科、呼吸器内科



## 豊かで心地良い、まちの元気をつくる診療所

### クリニック、ライブラリ、カフェで構成

山口県東南部に位置し、人口約13万5千人を擁する周南市は、市の南部が瀬戸内海に面していて、臨海部には工業地帯が広がっている。この夜景は日本夜景遺産に認定、日本五大工場夜景としても有名で、これを目当てに訪れる観光客も少なくない。一方、臨海工業地帯とは対照的に、北部は中国山地の一部に当たり、農村地域となっている。

周南市は平成15年(2003)4月に徳山市、新南陽市、熊毛町、鹿野町の合併によって誕生した。今回訪ねた内科、循環器内科、呼吸器内科の外来診療に加え、在宅医療、健診などを行う「おのクリニック」(小野 薫院長)は、JR山陽本線・山陽新幹線徳山駅から北西約6kmの場所にある。最寄り駅は徳山駅から1つ先の新南陽駅だ。

現在の外来患者は1日平均121人、通所リハビリの利用者数は同32.7人だが、来院者のほとんどは車でやってくる。ただ、通所リハビリ利用者は送迎サービスがあるので、それを利用する人も少なくない。

道路から案内表示を見つけ敷地に入っていくと、まずそこにあるのは「Cafe 元気スイッチ」だ。そし

てその奥に建物が続いている。次いでライブラリがある。その先が1階に診察室やCT検査室など、2階に通所型リハビリテーション室を備えるクリニック本体だ。クリニックの玄関は、当然のことながらライブラリとカフェとは別だ。だが、それぞれは外に出ることなく屋内で移動できるようになっているので、利用勝手が良い。

正面の駐車場(40台収容可)に入って建物全体を眺めて、その潇洒な姿は、イメージしていたクリニックの趣とはずいぶん違うことに驚いた。それに建物の周囲に植栽された木々や花々がきれいで目を引く。

ちなみにこの駐車場、休日と水曜日の診療後の時間には地域子どもたちの遊び場として開放しているが、珍しい事例といえるだろう。また、同院の南側を走る周南バイパス脇に、周南市のランドマークともいえるTOSOH PARK 永源山(永源山公園)があって、樹木に覆われた小高い山のように見えるそれが、敷地内から目と鼻の先に臨める。

周辺の環境もアクセスするのにも便利な申し分のない立地だ。同院は、平成19年(2007)に現在地から東へ400mほど離れた場所に開院した。その後、業務拡張に伴い、平成30年(2018)5月に現在地に移転。というよりも小野院長のビジョン実現のためと

いう方が正しいかもしれない。その当時、周辺には住宅などはほとんどなかったというが、その後、近隣に住宅が立ち並ぶようになって、いまや近辺は集落となって、その頃の風景とは全く異なっているという。

## 確かな使命、未来像、信条

ところで、開院以来、目指してきたものは何だったのだろうか。小野院長と院長の妻でもある小野祐紀子副院長の話聞いて、「地域」、もう一つは「まちづくり」という2つのキーワードが浮かび上がった。

地域の人々の、特に同院が標榜する診療科を中心にプライマリ・ケアにおける「拠り所」として機能していることはもちろんだが、さらには、クリニックを中心としたリハビリテーション室、カフェ、ライブラリ、さらには駐車場に至るまで、単なる医療機関としての機能だけではない、地域の人々、スタッフと患者、その家族がつながり医療やまちについて語り合う、コミュニティースペースとしての機能を果たしている。まさにこれこそが開院以来、小野院長と祐紀子副



小野 薫院長と小野祐紀子副院長 夫婦二人三脚で

院長が目指してきた姿かたちなのだろう。

クリニック、リハビリテーション室、カフェ、ライブラリのいずれもが、患者をはじめとする来院者にとっての心地良さと穏やかさを追求したことによって、木材を多用した空間デザインに仕上がっている。

しかし、こうしたレベルの高いコミュニティースペースは一朝一夕にできたものではない。思いや考えを形にすることはなかなか難しいが、そもそも形にする前提となる思いや考えなくして形づくることはできない。

この実現の前提となっているのが「おのクリニック」が掲げる3つのコンセプトだ。1つ目が「医療でまちの〈あったらイイな!〉を実現します」というミッション（使命）だ。2つ目は「健



クリニックとライブラリ 中央にクリニックの玄関があり、その手前にライブラリの入り口がある。



病院玄関までの小路 植栽も豊かで、四季折々が花が咲く。反対側には広い駐車場があり、「遊びバ」として地域の子もたちに開放している。



受付 院内に入った瞬間、アロマの香りに癒やされる。



ロビー あちこちに花やアート作品が飾られ、見飽きない空間



診察室



「聴きナス」腕章 この腕章を付けているスタッフが、患者や家族の相談事に気軽に応じる。



スタッフステーション



検査室



感染対応室 3室ある。



CT検査室 頭、頸部、胸部、腹部、骨盤腔を主に検査する。



運動負荷検査室 トレッドミル検査で不整脈や狭心症の有無を調べる。



リハビリテーション室 広い空間に最新のマシンが揃う



レッグプレスリハフ、レッグエクステンション、アブダクション・アダクションが並ぶ。



レッドコード



エルゴメーター



リハビリ患者用送迎車

康で、活気あるまちづくりに貢献する」というビジョン（未来像）で、医療機関として、「病気にならず、病気が悪くならず、しっかり歩け、呆けず、いつまでもいきいきと過ごせ、穏やかに逝ける……そんなまちづくりの力になりたい」と謳う。

そして3つ目は「チーム一丸となって、まちの健康・発展に貢献します」というクレド（信条）である。「私たちは、常にスペシャリストであるよう努力します。私たちは、医療は究極のサービス業と考え、快適で、丁寧な医療サー

ビスに努めます。私たちは、常に心地よく、いきいきと暮らせる環境づくりに努めます。私たちは、笑顔とYESで始まるコミュニケーションを大切にします。私たちは、NOをできるだけ言わず、一緒に最善を考え、最後まで伴奏します。私たちは、変化を恐れず、誰もがイイな!と思う医療、サービスにこだわります」と、ここに医療機関としての矜持を示している。

こうした3つのコンセプトに基づき、ハード、ソフト両面においてこだわりのクリニックをつくり上げてきた。その結果、クリニック、カフェ、

ライブラリが同一敷地内に併設され、シナジー効果が実現できているといえるだろう。

## 「地域への恩返しをしていきたい」

では、それぞれを見てみよう。

中心となるクリニックは、標榜する専門科における診察、診療に必要な医療機器を一通り取り揃えている。通常の血液検査などの検体検査は、外部の検査会社と徳山医師会へ委託しているが、緊急を要する血液検査に限っては院内で行う。また、血栓の可能性を調べる検査（D-ダイマー）、心筋梗塞の可能性を調べる検査（ト

ロポニンiやCK-MB）、動脈血ガス分析などの特殊な検査も行っている。

主に頭、頸部、胸部、腹部、骨盤腔を検査するCT（読影は徳山医師会病院に依頼）、頸部（甲状腺・頸動脈）、心臓、腹部、骨盤腔、下肢静脈を検査する超音波（エコー）検査装置、四肢動脈の血圧を同時に測定することで狭窄の可能性を評価する血管脈波検査装置、トレッドミル検査によって不整脈や狭心症の有無を調べる運動負荷検査装置などのほか、さまざまな専門科に必要な各種検査機器が用意されている。

リハビリテーション室では、疾患別のリハビリ（医療保険）と維持期リハビリ（介護保険）

を行っている、理学療法士による評価を行い、個別に計画と目標を設定し、広々とした空間で多彩な最新のマシンを駆使したきめ細かなサポートを実践している。

軽度認知機能障害（MCI）ケアを目的としたエルゴメーター、筋力や持久力を上げるためのリカンベントバイクとエアロバイク、患者の能力に合わせた歩行練習および心肺持久力系のトレーニングを行うことができ、流れるベルトの上を歩行する有酸素トレーニングマシンのトレッドミル、ストレッチや筋力増強に効果がある天井から吊るされたレッドコード、膝や股関節を伸ばす機能を改善するレッグプレスリハブ、大腿四頭筋と内側広筋を強化するレッグエクステンション、股関節外転・内転の両方を鍛え、股関節を開閉する機能を改善するアブダクション・アダクションなどなど。

こうしたさまざまなマシンが設置されたりハビリテーション室は、スポーツジムの趣すら漂わせているが、もちろんそこは患者や高齢者を中心としたリハビリの舞台。スティックにマシンと“格闘する”スポーツジムとは違って、利用者がリハビリに勤しむ姿はゆったりのびのびした雰囲気だ。

一方、ライブラリにおいては約2千冊に及ぶ蔵書が置かれ、ここでの読書、閲覧、貸し出しはもちろん、休憩コーナーとしても開放している。空間デザインも秀逸だが、随所にある置物なども小野院長と祐紀子副院長のこだわりとセンスが感じられる。また、この場を使って、これまでにテーマ・内容に即した外部講師を招いてさまざまなワークショップやコンサートなどを開催している。企画は“硬軟”あって、まさに縦横無尽だ。

また、「Cafe 元気スイッチ」は、黒色の天井に白い壁、大きな窓にシンプルで開放感のある空間が特徴で、席数はカウンター席とテーブル席合わせて26席。ランチセットやドリンクメニューもまちなかのカフェのそれに見劣りしない充実ぶりだ。



スタッフみんなで「いつも笑顔が絶えない充実した職場環境です」と女性スタッフが話していたのが印象的だった。

取材時には来院する患者に出会うことはなかったが、この時、カフェを利用して語り合う地域の高齢者女性が3人いた。なるほど、同院が目指すコミュニティスペースの“風景”そのものだった。また、この直後からはカフェに地元テレビ局の取材が入ったのだが、それを見るにつけても同院の注目度の高さがうかがえた。

開院して17年。すっかり地域に根付いている同院だが、「開業して長い時間が過ぎました。診察、在宅医療、看取りなど、多くを経験し、いろいろと患者さんや地域の方々に教わることで、勉強になることが少なくありませんでした。これからも地域への恩返しを続けていきたいと思います」と小野院長は語る。

地域において、こうした医療機関が中心となったまちづくりが推進されることは、これからの社会環境を考える時、とても意義あることだ。地域住民からの理解を得ることはもちろん、地域の医療機関や福祉施設などとの連携も強固なものでなければならない。

具体的なアクションプランを掲げ、さらに実現させていくことは極めてハードルが高い。このクリニックのクリニック機能そのものとライブラリ、カフェが一体となったこの場は、医療、介護などの悩みを相談できる窓口や学びの場を提供することで、市民が安心して、心穏やかに集える施設になっている。小野院長が別に設立した「NPO法人しゅうなんまちなか保健室」の目指す、地域住民がいきいきと暮らせるまちづくり実現の象徴となる拠点でもある。



ライブラリ 温かみのある空間に、小野院長と祐紀子副院長の目利きによる家具やアート作品が並び、蔵書は約2千冊ある。パン・野菜などの販売やワークショップを行う「おのマルシェ」や展示会（写真はイランの手織物「ギャッペ」）などのイベントも行っている。



Cafe 元気スイッチ 2種類のランチプレートのほかに、カレーやデザートもある。予約しないと入店できないこともある人気店だ。



各所にあるアート作品を見つけるのも楽しみのひとつ

アーティストの望月通陽さんがトイレの扉に直接点描した作品